The Zoological Society of Japan

面に研究を續けて行かうと思つてゐた矢先、圖らずも先生の訃報に接し、全く失望して終つた。然し英靈は絶えず、吾々を遠くから導いて下さる事と思ひ、生物地理學の爲めに大に努力し、先生の靈を慰めたいと思ふ。

渡瀬先生とマングース輸入

岸田久吉

農林省畜産局鳥獸調査室

I. 前書

マングースと云ふ名は元來一種の動物の名ではなく、類の名である。卽ちジャカウネコ科 Viverridae の內の一亞科 Herpestinae の通稱なのである。支那の書物では古くから食蛇鼠と呼んで居る。我が和漢三才圖會卷 39 鼠類の所には之を

「ヘビクヒネズミ 能く蛇を食ふ。凡そ蛇は殊に好んで蛙及鼠を食ふ。而るに復りて蛇食ふ蛙 蛇を食ふの鼠あり。」

と說いて居る位で、何種のマングースでも能く蛇を食ふ。蛇の外に近代の意味に於ける鼠をも食ふ。暖地、熱地では蛇の害も鼠の害も甚しい。それ故其驅除撲滅のために此の類の利用を企てたものが方々にある。

本邦でも鹿兒島や沖繩等の縣の樣な暖地では野鼠と毒蛇の害に依つて住民の幸福が非常に割引されて居る。渡瀬先生は應用動物學上の重要問題の一として此に研究を積まれた結果 common Indian mongoose と呼ぶ所のマングースを印度から明治 43 年卽ち 1910 年に沖繩縣へ輸入せられた。此が我が世俗に單にマングースと呼ばれて居る所のものである。私は曾つて此のマングースの輸入後の成績を調べた因緣があるので、鏑木外岐雄博士から此の記念號に綴ることを依賴されたのを機會に、最も正確と信ずる所に從つて、大體のいきさつ等を記すことにした。併し時間が尠く且つ問題の性質上記錄の蒐集がむつかしいので誤があるかも知れぬ故、お氣付きの方は何卒御敎示をお願致します。

II. 參考文獻

1) 明治 43 渡瀬庄三郎 マングースに就て—沖繩敎育 No. 49, pp. 4-7. 講演の自由筆記

2) 明治 43 秦藏吉 マングース輸入と渡瀬博士—沖繩敎育 No. 49, pp. 20-23.

3) 明治 43 (記者不明) マングース輸入記錄—本誌 Vol. 22, No. 260, p. 359. 存外此の記錄には誤がある。見る者注意を要す。

4) 明治 43 (記者不明) マングースに就て(本會例會記事)—本誌 Vol. 22, No. 260, p. 361. 先生の講演の樣子がよくわかる。

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

5) 明治 43 渡瀬庄三郎 沖繩の鼠と飯匙倩—富山房發行學生 Vol. 1, No. 4, pp. 51-57, 2 textfigs., 1 pl.

6) 明治 44 渡瀬庄三郎 渡名喜島のマングース繁殖す—本誌 Vol. 23, No. 269, pp. 109-110.

7) 大正 14 松山亮藏(畠山久重改訂)動物界之智嚢 (マングースの件は p. 259)

8) 昭和 2 (一月二十四日)(記者不明) まん公の輸入と渡瀬博士—沖繩日之出新聞 No. 572. 文獻 2 に拠つて書いたものらしい。

9) 昭和 2 岸田久吉 マングースの食性調査成績—農林省畜產局鳥獸調査報告 No. 4, p. 79-120, 1 pl. 筆者が此の報告を書いた時には文獻 1, 2, 5 を見落して居た。此報告は渡瀬先生のマングース輸入の功罪を論ずるために書いたものではなく、唯沖繩縣下に於けるマングースの食性を胃袋の內容からしらべてみた結果と輸入の史的過程を按排して作つたものである。渡瀬先生には大體の經過を申上げ、印度に於ける先生の活動された有樣をお話願つただけであつた。二三の先輩から其の事情をただされたこともあつたから、率直に、玆でも有りの儘を陳述させていただくことにした。草稿を寄送願つたこともなく、何人からも拘束されず、全く自由に、私が知つた眞實をのみ記錄したものであることを高調に傳へねばならぬ。

III. マングースを輸入する渡瀬先生の理論

先生は"多く聞かれ、多く讀まれ、多く調べられ、正しく且つわかりよく考へられ、少しく書かれ、少しく記された。"と是の如く私は觀て居る。先生は兎に角一かどのことでなければ、書かれなかつた樣に思へる。その少しくしか書かれなかつたものでさへ、何度か書き直され、はたの者には想像も及ばぬ程に苦心をされたものである。それから一寸學位でも有たうものなら嘘や眞をこきまぜて通俗記事を書く者が尠くない當世に先生は學俗を問はず、自分の名を出される程のものは十分に愼重にされたものであつて、先生に敎を蒙つた十三年の間、私は非常に大きな感銘を受けた。先生がマングースを輸入されたのにも此の過程が遺憾なく踏まれて居る。それは文獻 1, 5, 6 に明である。それを主に先生の文から取つて見てもらふ。

動物活動の動機 先生は之を四つに分たれて居る。第一は食慾であつて、動物は食はねば活きられぬ故、百方努力して食物を得ようとする。第二は有機的害敵を避けようとすることである。自分よりも强い動物の襲擊をまぬかれて、自己を保存しようとする。第三は無機的害敵をまぬかれようとすることである。自己の生存に都合のよくない雨露寒暖の惡結果からまぬかれ、都合のよい境遇を求めて、健康を維持しようとする。第四は生殖慾であつて、種の繼續を計らうとする。以上四つの衝動の全部又は一部のために動物は絕えず努力活動して居る。

人間と動物との關係 以上の目的を達するために動物は種々の方向に發展するが、其の一つは早くから人類と親密な關係を結ぶことの利益を見て半ば人間に寄生したる種類である。人間の住む所には必ず食ふべき物資や水があり、棲むべき個强な建物や樹木がある。子孫を經營するにも都合よく、敵害の少い場所がある。故にスズメ、カラス、ネズミ、昆蟲等の諸動物が寄り集まるものである。其の內、人間に危害を及ぼすものは之を勦絕する方法を講じなければならぬ。

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

有毒動物の二種類 等しく人間に害を與へる動物であつても起原には二種類の區別がある。其の一は天然に棲息するもので、土地がよく草木が茂つて澤山の小動物が繁殖する樣な然も人跡未だ稀なる所に於て、人間が衝突をする性質のものである。歐米の狼、朝鮮印度の虎、アフリカのライオン、馬來半島からアッサムにかけての野象等の例がそれである。其の二は人間から物資を受けて棲息するもので、人文的經營の盛んな所—建物や耕作場の增加と共に次第に殖えて來る動物である。イヘバイ、家鼠、シロアリ、ハブの如きが其の例である。

恐るべき鼠の害 沖繩に於ける二つの地方的患害は鼠とハブとである。鼠はサトウキビ、マメ、サツマイモ、米等の農作物を甚しく害する。殊に重要農作物たるサトウキビに於いて被害が著しい。年によると鼠害を受けたサトウキビは 30% にも達する。昔から鼠算と云つて其の繁殖が速く、一番ひの鼠が三年間に二千萬頭には殖える。土地が豐かで食物が多く敵さへなければどしどし繁殖することは見易い道理で、單に人類の勞力を以てそれを撲滅することの困難なるは更めて云ふまでもないことである。

自然現象の連絡 さて沖繩に居る鼠は普通の家鼠と野鼠との二種であるが、これ等は人間が沖繩へ來て物產を他へ運ぶと共に、他から他人の造つたものを運び入れる、卽ち自然、船の出入がある。其につれて、幾回も日本內地、支那又は南洋から來たのであらう。一動物が殖えるとその結果は必ず他に及ぶ。鼠が殖えると人は災害を被つて悲むが、その反對に喜ぶものが他に現はれる。それは卽ちハブである。

猛烈なるハブの害 薩摩列島に棲むハブには二種ある。一は沖繩本島と大島に居り、他は先島に居る。ハブの人畜に及ぼす害は中々少くないもので、沖繩縣下では年々百人足らず、大島、德島では三百人足らずの住民が害を被むる。熱い國では朝夕に涼しい時を利用せねばならぬのに、ハブに食ひつかれる恐があるため、朝も早くから、夜も遲くまで外で働くことを得せぬ。

離れぬ鼠とハブ ハブは深山幽谷と云ふ樣な人跡の稀な所には餘り見ることはなく、却つて常に人里近く棲んで居る。それは人家附近には食物が多いからで、鼠は勿論のこと、雞のひな、卵などはハブを人家附近にみちびく主な原因である。サトウキビの收穫時には鼠が野に居るから、ハブもそれを追うて野に居る。收穫がすめば鼠は人家に入り込み、之を追ふところのハブも亦人家に入り來るのである。斯樣に鼠とハブとには離れられぬ關係がある。ハブが多く居るのは鼠の多いためであり、鼠の多いのは人間の耕作するサトウキビやサツマイモが多いからである。

今日の如く鼠が多大の食物を得て居る間はハブも容易には減少せぬ。併し人

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

間は食料たるサツマイモやサトウキビを作ることをよすわけにはいかぬから、何か人爲の法を以て鼠や蛇を撲滅する工夫をせねばならぬ。

人爲の害は人爲で除け 鼠のみの害ならば尙ほ忍ぶべきかも知れぬ。併しハブの如きは決して人家附近に徘徊することを許すべき性質の動物ではない。試みに思へ。若し吾人が住宅の附近や往還に毎夜毒刄を提げた曲者が出沒して人人を脅かすとすれば、如何なる手段を盡しても、それを除かねば止まぬであらう。ハブは卽ちこれに等しき、否な、これ以上の害物である以上、鼠やハブは人力を以て如何ともする事の出來ぬと云ふものではなく、もともと人類が不知不識の間に繁殖を助成したものと見るべき理由あるもの故、やはり人爲を以て之に當る望がない筈は無い。卽ち鼠と蛇とを巧に捕へ、殊に蛇の卵を搜して食ふので有名なマングースを輸入するに至つた理由だと述べられて居る。

IV. マングースの輸入を理解させた渡瀬先生の努力

渡瀬先生がマングースを輸入されるに當つては先生十八番の動物地理學上の理論が之を助けたことは疑ひ無い。そのことは御生前に能く承つたものであるが、それは動物地理學の應用上の價値を考へる程の方々は誰しも思ひ至られる所である。併し世人の耳には存外入りにくい。其ためか先生が之をマングース輸入に際して書かれたものの中には省略されて居る。兎に角先生の理論は立つて來た。今度は之を地方人に理解せしめる必要がある。先生は口に筆に又公開實驗に於て之を訴へられて居る。

口を以て公衆に訴へられたのは明治四十三年四月十四日で、沖繩島那覇尋常高等小學校に於て、縣教育會の請に依つて大講演をされて居るのである。其の大要は文獻に出て居る。

筆を以て關係當局に說法されたことはたしかで、御生前に承つた所である。之を一般に示されたものは文獻5に見られる。

公開實驗で以て公衆や當局者等に理解せしめられたのは誠に欽仰に堪へぬ所である。文獻 2, 5, 8 に明示されて居る。2 から引用する。

マングースと鼠、ハブとの試合「明治四十三年四月十五日午前十時は愈マングース對鼠、ハブとの試合初めなり。

農事試驗場の一室を取片付けて試合の場所と定むるや河村、和田、岸本三事務官を始め、各課長、廳員、渡瀬、玉利兩博士、新庄農學士、那覇區長、縣會議員、辯護士、實業家、新聞記者、郡區役所員、紳士紳商、老弱男女押し寄せ來り、事務室も搖り崩さん許りの雜沓を極めたる中にマングース一頭を先づ室內に放ち、後鼠一頭を入れしにひらりと飛び付き、急所に喰ひ付き鼠を仰向けに押し付けて止めを指し、直に鼠の上顎より頭の肉に嚙み付き、さも甘相に喰

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

ひたるは、是れマングースが日本生肉の馳走に預りし第一着なりき。

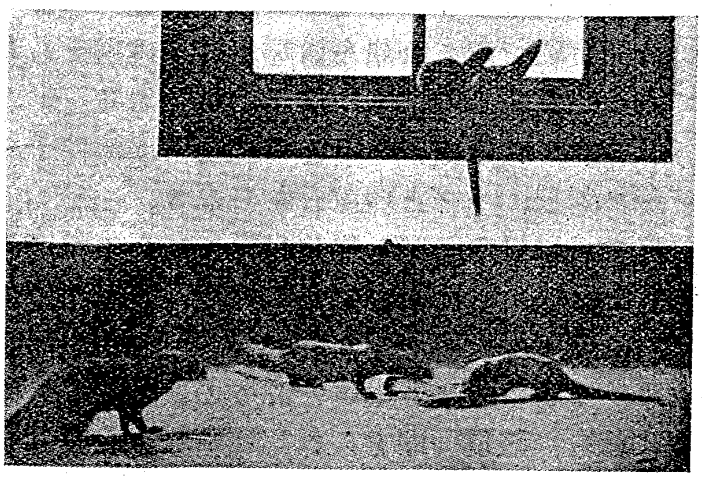
鼠との試合のお手際は拜見した。さて是からがハブとの立合。人々片唾を呑んで待ち居たるにハブ取りは風呂敷よりハブを出し室内に投げ入れた。マングースは一向頓着なき樣子。加之餘り大勢の見物人に取卷かれ密閉せる室に飽き果てたるが如く且初め鼠の馳走に腹便々とふくらしたる加減かハブを見もせず。氣短き人は“アヽこれがならん”と私語するもありき。暫くして不圖かぎ付けすらすらと何氣なくハブの前に行くや否や先生すかさず、鎌首をもたげてマングースの脊中を打つたが、少しも毒に感ずる模樣もなくピンピン元氣で駈け廻つて居つた。既にして又一頭を入れた。マン公頻りにかぎつけつつありし内にハブ又一撃を與へしにヒラリと身をかはして毒牙を避けた。觀者“ナール程”と稱讃す。尙ほつかつかとハブの前に行きしに此度は鼻先を打たれて血が出たが、これもやはり毒に感ずる氣味もなく、至つて平氣であつた。

印度のコブラは一尺以上も鎌首を上げてマングースに向ふ（岸田隆記文獻1に在る）相であるが、此地のハブはぐりぐりと身體を卷いて其の眞中に首を据ゑて二寸許り上げて居る。コブラは上手より來るが、ハブは下手より掛る。コブラとの角力には慣れて居るマングースも、ハブの下手には閉口と見え一寸不覺を取れり。

段々に見物人は殖えて玻璃窓を破壞せんとする危險あり。下には押されて死物狂の目に逢はされたるもあり。一先此處を引揚げて縣廳にて更に荒手の勝負と定まつた。

同日午後三時縣廳會議室の片隅に於て外のマングースと取替へ再び試合に及んだ。

今度はハブを入れるや否や電光石火すさまじい勢にてハブに喰ひ付き、物の見事に大勝利を得。而かもハブが口を張りて十分に開きし其の上顎に嚙み付きて喰ひ殺し、頭より其の肉を賞味するに至つては實に何とも言へぬ怪物、其の上ハブの毒に感染せざるは益益以て妙といふべし。此の模樣を見て居りし渡瀬博士の喜び、河村内務部長の拍手、マングース萬歳、渡瀬博士萬歳、沖繩縣萬歳。而して此の激戰の有樣は恰も好し春華園主人が撮影に成功したのであつた。」



筆者沖繩縣視學秦藏吉氏は“希くは縣民一般の深き注意

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

と保護とに依り適當に繁殖せしむることを得ば此のマングースに依つて彼の恐るべき毒蛇のために古來幾多の同胞が悲慘の最後を遂げし千春つもる鬱憤の仇討をなすと共に將來人畜の生命上に大關係を有するのみならず延いて產業上に將た學術上に其の利益と幸福とを與ふること實に圖り知るべからざるものあらん”と云ひ、先生に“謹んで感謝の意を表”して居られるのである。

V. マングース輸入の基礎研究

渡瀬先生はマングース輸入に就ては多年先進の報告と經驗を探索調査せられた。其のことは誰も推知する所である。後年本誌に出た外國に於けるマングース調節に關する樣なことは以前からマングースを移入利用した地方では經驗され發表になつて居た所であつて、先生はあらゆる其の說明中に失敗又は災害について豫め如何に處置すべきかを海外の事實を基礎として明示されて居たものである。卽ち一例をあげるならば文獻1に旣に次の如く出て居る。

「かつて瓜哇に於て鼠害の甚しき折其の驅除法に苦心して先づ南アメリカより一種の墓を持ち來りて試みしが失敗に終り、其の後慓悍なる赤蟻、鼬、英國の捕鼠に巧みなる一種の犬等を試驗せしが十分の效はあらず。最後にマングースを十九疋持ち來りて試みしに今度は見事に效を奏して、今日に於ては其の結果砂糖のみにて百五十萬圓の增額を見るに至り、其の他珈琲などの栽培にも大に利を得つつあり。然れども今日はマングースの繁殖過度になりて他の家畜に害を及ぼし、或は共喰ひをなす樣になりしは注意すべきことなり……」

斯の如くマングースは有效なる獸なれ共氣候、食物のよろしきを得ば何程にも繁殖するものにて、何物に依らず過度に繁殖すれば却つて害あるものなれば、他の例に倣ひて其の度に至らざる手段は豫め講ぜざるべからず。然れどもマングースの毛を檢すれば、茶色と白色の節ありて美なり。これを以て或る製作に使用する途を見出さば決して其の多きに困らざるを得るなり。

其の他新聞雜誌にも談話されたのが載つて居り、過剩繁殖の場合の心配は前以てして居られたことは先輩數氏から私が聞知した所であるが、遺憾乍ら直接それらを讀むことが出來なかつた。私は先生の御性格から考へても此の點に就ては保證出來ると考へて居る。

敵を知り己を知るは兵家必勝の法とか。先生は明治四十二年の春マングースを放つべき沖繩の實情を踏査されたのである。文獻2に曰く。

「四十二年三月三十日始めて我が縣に渡來せられ、爾來縣視學秦藏吉の案內にて那覇、首里、絲滿、西原、宜野灣等を踏査せられ、此の間或はハブを解剖し、或は鼠を捕獲する等、每日早旦より薄暮に至る其の熱心は、實に驚くべきものありき。引續き四月十二日縣屬大山武輔、島尻郡書記松方太郎二氏の案內にて

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

更に渡名喜島に渡らる。蓋し一小離島に試養せんとの考慮ありしに依る。滯在二十餘日にして歸京せらる……(後略)」

此で己を知る方は十分だつたのであるが、敵を知る方には更に十二分の努力をされた事實がある。卽ちおそくともそのことは明治四十年に始まつて居る。此の年先生はボストンに於て催された第七回萬國動物學會大會に日本委員として出席せられたから、鼠害にマングースを利用した西印度の學者に向つて、我が沖繩及大島に於ける鼠とハブとの害の甚大なることを話され、意見や注意をもとめられた。夫れ等の學者は Indian mongoose の移入飼養をすすめ、且つマングースは餘り繁殖し過ぎると他の畜類にも害を及ぼすけれ共、適當に殖やすに於ては必ず奏效するであらうと敎へたのである。

先生は歸途明治四十一年十二月印度セイロン島に立寄つて、マングースがコブラを捕へる實情を見て來られ、愈々マングース移入利用の決心をかためられたのであつた。

マングースの習性について更につつこんだ知識を有たれたいとの願望が强く、先生は輸入の際も親しく印度に行つて人夫と共に捕獲に從事されたものである。文獻 2, 8 に曰く

「明治四十二年十二月二十四日東京出發……カルカッタ着の上ガンヂス河口附近の三角洲に於て捕獲に着手せらる。……さて其の捕獲方法に就きては每日人夫十四五人も雇入れ網又は罠等にて行はれ……始め六頭を得る迄は左迄困難とは思はれざりしも、其の以後は容易に捕ふるを得ず、殆んど閉口せられたりと云ふ。夫れは其の筈、我が國にて鼬や貂などを四五頭も捕ふると假定せよ。果して出來得べき業なりや如何。之を思へば博士の苦心察するに餘りあり。斯くして三十二頭を得られたり……(後略)」

マングースを西印度ジャメーカ島に移して大成功を博した最初の記錄保持者 W. B. Espeut, (1882 P.Z.S. London, pp. 712–714) が移入したのは ♂4 ♀5 卽ち九頭、瓜哇へは十九頭に過ぎなかつた。頭數に於ても先生は大事を取つて三十二頭を捕獲された。此の用心深さが極めて必要であつたことは、沖繩着の時二十九頭に減じて居る事實が明白に立證して居る。

先生は"兎に角今は各地鼠の問題の盛なる時なれば、日本の爲のみならず、世界の爲に十分の注意と熱心とを以て其の繁殖に盡力されんことを望む"(文獻 1參照)と沖繩で述べられてゐる通り非常に大きな期待を掛けて居られた。從つて輸入後の效果を詳かにしたいお考を有つて居られた。それには所謂離島であつて而も人口が定數狀態であり、人文狀態の變化が尠い所で、檢査するのが適當であるとせられ、渡名喜島を其の條件に叶つた土地として擇ばれたのであつた。(文獻 2, p. 21 及び文獻 6)

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

VI 輸入後のマングース

先生の輸入されたマングースは幸に沖繩島及渡名喜島に於て繁殖した。文獻6は其の一記錄である。而して鼠害及毒蛇ハブの被害は大に減少した。

鼠害減少に對しては異存の有る者は一人も居ない。併し毒蛇被害の減少には其に伴つて不平を感じたる者が出た。蛇害減少は內實にも結構なのであるが、ハブを捕獲して之を市井にひさいで居たハブ捕りなる職業者は失職したのである。"豈一言無きを得んや"さりとて不滿をその儘公衆に訴へることの不利は彼等の熟知する所である。雞や家鴨を不完全な設備で飼ふ人が時にマングースに家禽を殺された不平を吹聽するのを機會に之を大げさに唱へ出したのである(文獻7)。又ほのかに漏れ聞く所に依ると意外にも醫家がハブ血淸を用ひる關係から複雜な心理をあらはすとか。私が此所のところをはつきり書くことを憚かる所以は識者ならずとも御諒解になることと思ひ明言しないで止める。

先生はマングース輸入の當時內地へも之を生きた儘持つて來られ、多分に奏效の可能性有ることを知らしめられた(文獻3,4,5)。此も先生の鑑識通り必要度の大なるものであつた事は、沖繩とは土地の事情のちがふ諸外國カリホルニヤやハワイ等に於けるマングース過剩繁殖に因る被害及其の處置の報告が發表されるや、此が紹介は兎に角として、それ以上に害毒を誇張して喧傳する者が同學者間にも現はれたである。其の實それ等の人は沖繩の實情をしらべたわけではなく漫然と批難がましきことをしやべりまはつたのであつて、自ら思を致したら恥ぢることであらうが、輕率にも左樣な言動をして了つたのである。受賣ではあるが文獻7には明かに夫れが書いてある。私は恩師をかばふために此記事を作るものではない。沖繩に於けるマングースを胃袋を通して觀測した結果(文獻9)、之を言ふべきであると信じたからである。

兎に角不可思議にも批難の聲は可なり方々にひろがつた。併し先生は唯事實を重んぜられる胸裡から、無言で居られた。先生としては既に盡すべき一切の手順を踏んで來られた所であり、辯明がましいことを避けるのが男子の本領だと固く信じて居られたためである。先生の此の精神上の領域は私には立入り得るところであるとの信念が有る。

私の小報告(文獻9)が出てから誰も此に反駁を加へないのに見ても、今までの批難者等の根據が薄弱なものであつたことは疑ひ無い。

VII 輸入されたるマングースの現狀

渡瀬先生がマングースを輸入された理論上の根據、經營の實際、批難が幽靈に近いものであるとは前記の拙文で大要明かになつたことと思ふ。不十分な點は第二項の參考文獻で以て補つて頂きたい。

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

先生の此の事業が相當に奏效したものであることは有力なる地方新聞に十八年前に既に同地の有識階級間に行渡つて居たと同樣の記事が出て異議が公表されぬ事實が之を證明する。(文獻 2 及び 8 の對照を要求する)

先生の輸入せられたマングースの後胤は今も沖繩島と渡名喜島とに繁殖して居る。最も後者の數は近年人爲的に且つこつそりと減少せしめられた樣に傳へられては居るが、此の兩島に今尙ほ棲息して居ることは確かである。

而して私の調査したところ(文獻 9)では其の食性は次の如くに概論することが出來た。

沖繩縣から得たマングースの胃二十一個の內容を定性的に區別すれば哺乳類五種、鳥類二種、爬蟲類三種、兩棲類一種、昆蟲類八種、唇足類一種、圓形動物一種、植物質二片である。之を終年統計として定量的に觀察すると哺乳類に於てはオキナハハツカネヅミが大部分を占め、其の他も鼠族である。鳥類は世評を裏切つて家禽を含んで居らず、皆野生の小禽のみである。爬蟲類ではトカゲ、カナヘビ及蛇を含むで居る。兩棲類、魚類は格別のことが無い。昆蟲類以下大して問題とすべきものを見ない。

故に私はマングース輸入の動機から見て次の三項に就いて世人の注意を喚起して、本篇の筆を擱きたい。

A　沖繩縣に於ける輸入マングースは今日も尙ほ明かに鼠害及び蛇害の輕減に貢獻して居るものであることを確認されたい。

B　家禽特に其の幼鳥や卵はマングースに覗はれることがあらう。而し乍ら大局から見てマングースは沖繩島のために甚だ有用であるから、時と所とにより其の頭數を調節するは兎に角として、一般論としては之を絕滅せしむべきでないことを牢記されたい。

從つて家禽に對してはマングースから安全に生活せしめ得るだけの設備を爲すべきである。

C　マングースの保護をすると共に其の環境に十分注意をして、人類の爲になる樣に監視と研究をしてもらひたい。(以上)

NII-Electronic Library Service